

# 博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 19 号

2021（令和 3）年 5 月

聖心女子大学

## は し が き

本号は、学位規則（1953（昭和28）年4月1日 文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2021（令和3）年2月19日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

## 目 次

氏 名	欠ノ下 郁子 (かけのした いくこ) ……………	1 頁
学位の種類	博士 (人間科学)	
学位記の番号	甲第 44 号	
学位授与年月日	2021 (令和 3) 年 2 月 19 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入に向けた養護教諭への支援に関する研究	

氏 名	欠ノ下 郁子 (かけのした いくこ)
学位の種類	博士 (人間科学)
学位記の番号	甲第 44 号
学位授与年月日	2021 (令和 3) 年 2 月 19 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入に向けた養護教諭への支援に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 植田 誠治 (副査) 准 教 授 加藤 洋子 (副査) 教 授 水野 雅文 (東邦大学医学部)

# 博士学位論文の要旨

## 1. 目的

現代社会において児童生徒の精神疾患・精神的課題による保健室の利用者数や児童精神科の患者数は増加している。このような状況の中、養護教諭は児童生徒の精神疾患・精神的課題の発症に最初に気付く可能性が高いため、コーディネーターとしての役割も期待され、校内の支援や見守りで改善が見込める状態なのか、疾患の有無や学校生活の継続等について医師の診断が必要なのかを見極めて支援を行っている。

しかし、児童生徒の精神状態は、心理社会的ストレスや成長過程での問題と密接に関係しており、症状が動揺するためわかりにくいことや教育者の精神疾患に対する知識不足などの課題がある。また、養護教諭は一人配置が多く相談できる相手がないこと、精神疾患に関する業務上の困難感や養護教諭養成において精神保健にあてられる時間の少なさといった多くの課題も指摘されている。

このように、学校における精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入には、児童生徒を取り巻く環境において、改善すべき課題が山積している。以上のことから、本論文は、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への支援に関する実態および精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入を目指した養護教諭への支援について明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

本論文は、大きく3つの研究から構成され、研究1と2では全国の小学校・中学校・高等学校の養護教諭を、研究3では全国の高等学校の養護教諭を対象とした調査を行った。調査対象の選定では、まず各都道府県の小学校、中学校、高等学校の在籍児童生徒数を算出し、児童生徒数が最小である県を抽出した。次にその県の調査対象校を1校として、その児童生徒数で他の都道府県の児童生徒数を除し、層化して各都道府県の調査対象校数を算出した。そしてその値をもとに、乱数表を用いて各都道府県の公立学校の中から調査対象校を無作為抽出し、それらの学校に勤務する養護教諭1102名（研究1）、1115名（研究2）、および228名（研究3）を調査対象者とした。分析では、質問内容を単純集計した後に、主な基本属性である校種や養護教諭の経験年数など質問内容によるクロス集計を行い $\chi^2$ 検定および残差分析を行った。有意水準は5%とした。

## 3. 結果と考察

現代の養護教諭が支援すべき精神疾患・精神的課題は、発達障害、不登校、摂食障害、ひきこもり、うつ病、不安障害、パニック障害、統合失調症、強迫性障害などと多岐にわたっており、高等学校においては自傷行為も高い割合であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒に対する養護教諭の支援は、「学校長との連絡・連携」が84.1%、「学級担任との連絡・連携」が97.7%、「児童生徒の訴えの傾聴」が92.7%、「児童生徒の精神症状の観察」が83.6%、「保護者との連絡・相談」が79.3%であった。

養護教諭がDUPを「知っている」と回答した割合は4.6%と低く、養護教諭が精神疾患・

精神的課題のある児童生徒への早期介入の利点について「精神症状で苦しい時期が短くなる」と回答した割合が83.3%と最も多く、次いで「治療がより効果的になる」が73.2%であった。精神疾患・精神的課題のある児童生徒への医療者による早期介入の必要性について「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した校種別の割合は、小学校で95.3%、中学校で95.3%、高等学校で97.0%、その他で100.0%であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入において、養護教諭と精神医療者との連携の必要性について「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した校種別の割合は、小学校で98.4%、中学校で98.9%、高等学校で98.5%、その他で100.0%であった。

早期介入の障壁になるものには「思春期の特徴の複雑さ」が80.5%、「保護者の知識不足」が74.9%、「社会全体の精神疾患に対する差別や偏見」が69.9%であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入の困難については、「家庭との連携において、受診の必要性の共通認識が得られない」が養護教諭の一人配置では89.4%、複数配置では92.0%であった。

養護教諭が必要としている情報は、摂食障害、パーソナリティ障害、双極性障害、うつ病、統合失調症のある児童生徒への支援方法に関する情報であった。また、養護教諭が医療者に望むことは、教職員や保護者への知識提供、受診のタイミングの判断、いつでも相談できる窓口開設などであった。

養護教諭は多忙な日々の中で、なんとか時間を捻出しながら、多岐に渡る精神疾患・精神的課題のある児童生徒の精神症状を観察し、学校長、学級担任や学校カウンセラーと校内連携を図りながら児童生徒への支援を行っていた。また、養護教諭は社会における偏見、保護者の精神疾患・精神的課題についての理解不足から、早期介入において家族との共通認識が最も困難であると認識していた。しかし、早期介入の課題は、家族の認識不足のみならず、学校長や学級担任の知識不足、社会全体の差別や偏見、そして児童精神科の専門医が少ないことが考えられた。

#### 4. 結論

以上のことから、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入を目指した養護教諭への支援として、いつでも相談できる窓口や児童精神科を含めた専門家の情報を得ることができるホームページの開設やアウトリーチを含めた精神医療チームと学校との連携・協働の必要性が示唆された。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への支援は「チームとしての学校」において校内連携を図りながら行われているため、児童生徒を取り巻く家族、教員、学校長、養護教諭を含めたチーム全体へ専門的な知識提供やカンファレンスの場を設けることも養護教諭の支援になると考えられた。さらに、現職の養護教諭のみならず、養護教諭の養成課程教育においても、専門的な知識や支援方法を軸として養護教諭自身が疲弊しないような心構えなどの教育内容も養護教諭の教育的支援になると考えられた。

# Support for *Yogo* Teachers in Early Intervention for Students with Mental Disorders/ Mental Issues

## ABSTRACT

### 1. Purpose

At present, the rate of students with mental disorders is on the rise; thus, it is important for *Yogo* teachers to detect and support students with mental disorders/mental health issues. It is also necessary to determine the presence or absence of disorders and students' ability to continue school. Hence, *Yogo* teachers are expected to play the role of coordinators. However, an adolescent's mental state is closely related to psychosocial stress and growth related problems; as a result, mental health issues are sometimes difficult to understand because of the varied symptoms. Additionally, *Yogo* teachers are assigned to one person without other consultants and many teachers find it difficult to work with students with mental health issues.

Therefore, there is scope for improving early detection and intervention for student with mental health issues in schools, including parents and teachers' education, and the environment surrounding their children. This study aimed to clarify the actual situation regarding support for students with mental disorders/mental health issues and for *Yogo* teacher in early interventions.

### 2. Method

This paper is structured in three sections or studies. For Study 1 and 2, we selected *Yogo* teachers from elementary, junior and high schools nationwide; and for study 3, we selected *Yogo* teachers from high schools nationwide. The number of enrolled children in elementary, junior, and high schools in each prefecture was calculated, and the number of target individuals was extracted for each prefecture to select participants in Study 1, 2, and 3. The schools to be surveyed were randomly selected from public schools (full-time courses) in each prefecture, using a random number table; 1,102, 1,115, and 228 *Yogo* teachers were surveyed for Studies 1, 2, and 3, respectively. After tabulation of the questions, cross tabulation was performed the question contents of some basic attributes such as school type and years of experience of the *Yogo* teacher. Subsequently, the chi-square test and residue analysis were performed.

### 3. Results and Discussion

Modern *Yogo* teachers' state that the mental disorders and mental health issues of students are developmental disorders, school refusal, eating disorders, withdrawal, depression, anxiety disorders, panic disorders, and self-harm in high school. In addition, when asked about support for students with mental disorders/mental health

issues in schools by the *Yogo* teachers, 84.1% answered “contact/cooperation with the school principal,” 97.7% answered “contact/cooperation with the classroom teacher,” 79.3% answered “contact/consultation with parents,” 4.6% percentage of *Yogo* teachers knew about the duration of untreated psychosis (DUP). Respondents indicated that early intervention would help reduce the painful period of psychiatric symptoms (83.3%), and that treatment would be more effective than regular medicine (73.2%). Barriers to early intervention were factors such as “complexity of adolescent characteristics” (80.5%), “lack of parental knowledge” (74.9%), and “discrimination and prejudice against mental illness in society as a whole” (69.9%). Additionally, the difficulty of early intervention for students with mental disorders/mental health issues, was affected by “the necessity of consultation cannot be obtained in cooperation with the family,” 89.4% of *Yogo* teachers and 92.0% of multiple *Yogo* teachers. It was found that important information for *Yogo* teachers was methods for supporting children with mental disorders and mental health issues, especially eating disorders, personality disorders, bipolar disorder, depression, and schizophrenia. They sought detailed information and support methods. In addition, *Yogo* teachers wanted to be able to provide knowledge to faculty members and parents, determine the timing of consultations, and provide consultation at any time by medical professionals.

The results of this study show that *Yogo* teachers support students with a wide range of mental disorders and mental health issues, aiding school principals, classroom teachers, and school counselors. Additionally, it is difficult to have a common understanding with parents because of the stigma attached to mental health disorders and lack of knowledge of issues. However, the challenges of early intervention were not only a lack of knowledge by parents, but also a lack of knowledge by principals and teachers, discrimination and prejudice in society as a whole, and the small number of child and adolescent specialist psychiatrists.

#### 4. Conclusion

The findings suggests the need for a contact point for *Yogo* teachers where one can consult the teachers at any point in time and a website where information can be obtained from specialists, including child psychiatrists as support for early intervention for students with mental disorders/mental health issues. Since support for students with mental disorders/mental health issues is provided in the school as a “team,” coordinating with the adults who surround the students, such as families and teachers, providing a conference space for the entire team would also support the *Yogo* teachers. Furthermore, educational content, which emphasizes the attitude of *Yogo* teachers not only for in-service *Yogo* teachers but also for trainee *Yogo* teachers will not be exhausted and support methods, will be used for educational support of these teachers.



## 学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 欠ノ下 郁子  
論文題目 精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入に向けた養護教諭への支援に関する研究  
審査委員 主査：植田 誠治  
副査：加藤 洋子  
副査：水野 雅文（東邦大学医学部精神神経医学講座）

### 1. 論文の要旨

#### (1) 目的と方法

児童生徒の精神疾患・精神的課題が多様化・深刻化する中で、早期介入の必要性が指摘されている。それを主張する根拠の一つに DUP（Duration of Untreated Psychosis：精神病未治療期間）の研究がある。DUP は短いほど治療予後は良好であること、その一方で DUP が長いほど精神症状、QOL、社会機能、心理的・社会的発達への影響や自殺のリスクが増加することが報告されている。しかしながら児童生徒の早期介入には多くの課題が存在する。例えば一般市民の精神疾患に関する知識不足や精神疾患に対するスティグマから、保護者の多くは子どもの精神疾患・精神的課題を理解できず、学校において養護教諭が児童生徒の心の不調に早期に気づいても、精神科受診や学校の介入を拒むといった実態が明らかになっている。また教育者の精神疾患に対する知識不足も重なり、養護教諭が受診の必要を判断しても、学校内での早期介入の共通認識が持ちづらいという指摘もある。学校と医療機関との連携も求められており、精神疾患の好発年齢にあたる児童生徒への早期介入を実現するためには、養護教諭への支援体制づくりは急務である。

以上のような状況を踏まえ、本論文は、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への支援に関する実態および精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入を目指した養護教諭への支援について明らかにすることを目的としている。

論文では、養護教諭が経験した児童生徒の精神疾患・精神的課題の内容、支援の実態、学校と医療における早期介入に関連した課題、ならびに養護教諭の求める支援内容を実証的に明らかにしたうえで、精神疾患・精神的課題のある児童生徒の早期介入を目指した養護教諭への支援のあり方について考察している。論文は、大きく3つの研究から構成され、研究1と2では全国の小学校・中学校・高等学校の養護教諭を、研究3では全国の高等学校の養護教諭を対象とした調査を行っている。

#### (2) 結果と考察

現代の養護教諭が支援すべき精神疾患・精神的課題は、発達障害、不登校、摂食障害、ひきこもり、うつ病、不安障害、パニック障害、統合失調症、強迫性障害などと多岐にわたっており、高等学校においては自傷行為も高い割合であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒に対する支援は、校内において、「学校長との連絡・連携」が84.1%、「学級担任との連絡・連携」が97.7%、「保護者との連絡・相談」が79.3%、「学校カウンセラーへの相談」が83.1%であった。さらに、支援の現状においては、「児童生徒の精神症状の

観察」が 83.6%、「児童生徒の訴えの傾聴」が 92.7%であった。

養護教諭が DUP を「知っている」と回答した割合は、全体で 4.6%と低く、養護教諭が精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入の利点について「精神症状で苦しい時期が短くなる」と回答した割合が全体で 83.3%と最も多く、次いで「治療がより効果的になる」が全体で 73.2%であった。さらに、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への医療者の早期介入の必要性に対して「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した校種別の割合は、小学校で 95.3%、中学校で 95.3%、高等学校で 97.0%であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入において、養護教諭と医療者との連携の必要性に対して「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した校種別の合計割合は、小学校で 98.4%、中学校で 98.9%、高等学校で 98.5%であった。

早期介入の障壁になるものには「思春期の特徴の複雑さ」が 80.5%、「保護者の知識不足」が 74.9%、「社会全体の精神疾患に対する差別や偏見」が 69.9%であった。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入の困難さについては、「家庭との連携において、受診の必要性の共通認識が得られない」が養護教諭の一人配置では 89.4%、複数配置でも 92.0%であった。

必要な情報として、精神疾患・精神的課題のある児童生徒を支援する方法、特に摂食障害、パーソナリティ障害、双極性障害、うつ病、統合失調症に関する詳細な情報および支援方法を求めている。また、医療者に望むことは、教職員や保護者への知識提供、受診のタイミングの判断、いつでも相談できる窓口などであった。

養護教諭は多忙な日々の中で、なんとか時間を捻出しながら、多岐に渡る精神疾患・精神的課題のある児童生徒の精神症状を観察し、学校長、学級担任や学校カウンセラーと校内連携を図りながら児童生徒への支援を行っていた。また、養護教諭は早期介入や医療者との連携の必要性は認識しているものの、社会全体において根強い偏見が残っていること、保護者が精神疾患・精神的課題について未だに理解が不足していることから、早期介入において家族との共通認識が一番困難であると認識していた。しかし、課題は家族の認識不足にとどまらず、学校においては学校長や担任教員の知識不足、社会全体の知識不足および差別や偏見、そして医療においては児童精神科の専門医が少ないことなど多くの課題も明らかになった。

### (3) 結論

以上のことから、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入を目指した養護教諭への支援として、いつでも相談できる窓口や児童精神科を含めた専門家の情報を得ることができるホームページの開設ならびにアウトリーチを含めた精神科医のみならずリソースも含めた医療チームと学校との連携・協働の必要性が示唆された。また、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への支援は「チームとしての学校」において校内連携を図りながら行われているため、積極的に児童生徒を取り巻く大人たちである家族、教員、学校長、養護教諭を含めたチーム全体への専門的な知識提供やカンファレンスの場を設けることが養護教諭の支援になると考えられた。さらに、現職の養護教諭のみならず、養護教諭を養成する課程での教育においても、専門的な知識や支援方法のほか、養護教諭自身が疲弊しないような心構えなどの教育内容の改善も、養護教諭に対する教育的支援になると考えられた。

## 2. 本論文の評価

本論文は、精神疾患の好発年齢である児童生徒への早期介入の実現を目指して、養護教諭の視点から学校における支援の実態や課題を実証的に明らかにしたところに大きな特徴がある。精神疾患の早期介入に関する研究は、医療者による先行研究は多く報告されているが、全国の小学校・中学校・高等学校の養護教諭を対象として、精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入に関連した学校の実態を明らかにした大規模調査はなく、本論文は早期介入を実現するうえでの根拠資料として社会的意義が大きい。また、本論文で得られた精神疾患に対するスティグマ、社会全体の精神疾患に対する知識やリテラシーの低さ、医療と地域（学校・家庭）との共有認識を持つことの困難さなどの知見をもとに、今後精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入を目指した学校での取り組みの内容を明確にし、その実現性を高めたという点も評価できる。さらに、本論文の知見に基づく精神疾患・精神的課題のある児童生徒への早期介入は、精神疾患・精神的課題の重症化・慢性化を防ぐことのみならず、自殺や成人後の引きこもり防止や若者の自立支援につながるとともに、個人のQOLの向上および社会の経済損失軽減につながる可能性を持つものであり、本論文の持つ萌芽性も評価できる。

なお、本論文を構成する研究については、「心の健康問題を抱える児童生徒への支援に関する実態 - 養護教諭を対象としたアンケート調査より」（日本教育保健学会「日本教育保健学会年報」26, 2019, 15-28）、「精神疾患の早期介入に関する養護教諭の認識」（日本精神保健予防学会「予防精神医学」5 (1), 2020, 72-85）、「精神科医療機関への早期受診に関する学校と医療の連携 - 高等学校に勤務する養護教諭が必要とする支援 -」（日本思春期学会「思春期学」（受理済, 印刷中 39 (2), 2021）として、学術雑誌にて外部評価を受けた。また、先行研究の分析結果は「DUP (Duration of Untreated Psychosis) に関する文献研究」（聖心女子大学大学院論集 40 (2), 2018, 46-62）と「DUP (Duration of Untreated Psychosis) に関する研究の動向」（聖心女子大学大学院論集 41 (2), 2019, 1-31）として掲載されている。

## 3. 本論文の審査の過程

本論文は令和2年10月29日に提出された。同年11月4日に学長より審査の付託がなされ、11月12日大学院委員会承認による3名からなる審査委員会が審査を開始した。12月17日に第1回審査委員会が開かれ、本論文が持つ学術性と社会的意義から博士学位論文として認められるものであることが確認された。ただし、論文の中心概念である精神疾患・精神的課題の表現や論文全体の考察が不十分な点に関して修正の必要性が指摘された。これらの指摘に基づく修正稿により、令和3年1月21日に第2回審査委員会が開かれ、指摘された点が的確に修正されていることを確認した。令和3年2月12日に、学位申請論文公開審査会および最終試験が実施され、質疑に対する的確な応答がなされた。

以上により、審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位論文にふさわしいものであることを確認した。

博士学位論文  
内容の要旨および審査結果の要旨  
第19号

2021（令和3）年5月21日発行

発行 聖心女子大学大学院  
編集 聖心女子大学大学院  
〒150-8938  
東京都渋谷区広尾4-3-1  
電話 03-3407-5811（代表）